



諧 詠

世
表
紙

尔
ハ
く
た
の
り
に

全



序

御傘の霽世にうるほひ、毛吹はなみのニ叶を
 生し、尚その赤葉ひろこりて訛、沿の花千夏万化
 せり、たとへば春の夏のために古され、冬は秋
 に後て新しそ水か中に雑の百韻とかや古今の作
 例をみず、元祿戌室の年鬼貫はじめて一稿をまて
 俳の兄と号或、月の光を星に譲、或は花の句
 心を松に借す、やそら鳥獸草木の四季にあづか
 すと南まことに古れ、等、月夜の主なるむをとい
 とりかまけたるや、誰洛東の隱士、淡々成へし己に



其星移リ漸、その松ふりて、享保丁酉の歳新に雑の
 百句に巻を加てうたふ、又此作例をみす一日廿
 五によせて是か序せよとや、
 和せし東坡か風流にひそし、
 梅の句ひおとろ一にたりなんを桃李のうるひし
 きを知らんと顛すれはなにか難波のよしあしを
 論ぜよとはほあらず、彼星と松より玉なる事を
 今の作者の間しうゆも多かるべし、
 此言を拒こんと、強て望まされは待するに忍びす
 ひそかに巻中をえるに名残にうつりて松を返し

十行 廿四字詰

て直に花紅葉をいへり、是自然に晋子が風骨を
 得たるハ此子の外證をかいほす

享保丁酉仲秋下浣

逸民百丸書

雑の百句凡作例なきにしもあらず、此水か證とす
 るに百丸を先にたてず、
 存すいおこかす、
 なうてその水かたよるす、
 新たに高き山のふもとより分けのほる神楽の

情と發端に於て卷は十のみのみならずあく万
 年の少火を仰ぐものれ、文章のふかりさかむな
 り筆より是に月の座をゆづりほめて巻の
 卷を隔しむ。善哉淡子：淡子が是に淡子な
 し、其真是真非は誰か介たむ。是の友好るとまひ
 ぬしなにはゆ決し給へと霜ふり月ほしめのむゆが
 仙鶴連判

劇劇余が机上の一馬を得て世に揚越せん事を
 道ふ何かのひめ並にあらず説く是をあらあ

十行 廿四字詰

此時いふ事有謂、真に善の事情長くの人の
 とふたをとおたぬべし漸こころのまゝを引
 出すがて善時の風流をつゝ始終の連綿を以
 善子し叶ふべし句こには有べし一句に説し
 二善有さといふ人今尚善操しほ火に打く
 べたまへ、善かもをたたの作はひらぬといふ
 こハ小胸にひやくたんにや初またへちまのた
 人々を

花に風

うとみかき
今ほこり物

兼雄之能吟

半時庵 淡々

かつらきや余所に歌へ行衣の音

四季のしつくの分類 兼雄

石に成時をや帆にてへたつらむ

うるはしみせよ野にも櫛笥を

星うつる雨後の溜りを扇で飛カバフ

あれともいはず 巾燭吹消ス

綿の弟子立居り聲ヒコを学ひたり

せハ一き首尾もつく 柳橋

レセ

とものしけのい ちのし
重頼が納涼の句なりと
い子がみつかるの序
也

勅 在年一 公卿

書

無動而不移

来ぬハ米ヲ待ハサケナキ木賊原
 鳥鐘遠キ里ニ鍛冶アリ
 日野椀のぐらりく〜と逢て捨
 つし日水ハ及ハカに〜したき人
 ぬき是のうつし心ハ沢の亀
 傾城ともハ結ひたる庵
 形見こそ今ハ所々ハ小風の音
 ありひを透カすしとあふの竹
 針立に大内山のほかため
 夏をのつけに及らぬ 仇人

炷めて立は右白虎 左青竜
 岩もる末也菜に〜む 糊
 酒にそだハ地境に誤ハ留守の暮
 伊勢カササキの比も瘡あり
 裁ハ〜して立々迷ふたの窓の嘆
カ飲將水ハの気高く星の花咲
 頂ハの心ハもさきらす貴船川
 泪のぬまを尾ハにてお超お
ハ農ハ折〜 呵ハ了妙の伊達
 つ〜ま所望ハに指えつけられ

十行 廿四空語

大串の夜乳は物こそ悲しけれ
 ころすとも名いはいろの岳
 狂人のまことを出すもの狂ひ
 あいさ、病と書さして引な
 もの言の清いはあいく胸の月
 御法りを無下にまとのよしく
 水仙の宿とも詠う振言ひ也
 おじやれ／＼のかさす夕照
 親達の寝入った魚魚有かたき
 星月夜道とふさしたつ恋

し十ろ

とりじめも十八公の吹返一
 太女いけたまへり又あふ改と
 身の次々な中々ハ様なき心也
 晴たさるるに我中降
 高生とあわしよも高戸いひけす
 千々の社の耳をあてかふ
 柵の空をさひ遠く打もた水
 互にわいし都よりカス融
 趙高が二世の契りもろハの空
 一寸樓の帯をひと一に

し十不

十行 廿四字詰

足道つて^名火は燃る油
 妬いありてつんくとかむ
 鏡ひの鏡に^情あな邊あ糸の色
 他より品^情のにくさ大とこ
 裸にて湯泉口ははしくくも敷
 うんと起してじんを位せし
 いつか又あふ^情ろ梅萩風の星
 首飾を^情庄野近果の
 けちろくのゆるま過せといひせす
 昔々たは有よしさ灸

し十一オ

引ことて口説う^キ旗ハ金もといひ
 人も指のけなかくも^情喰ふ
 一頓城下はひと^情町の昼
 評言と評言^情姿わけかね
 汐波の短き神も盛あり
 解つてあふかに七手八脚
 南極のふけ行すゝの顔さハ
 平等院もかほうな氏
 根心の木の外には杉斗
 感^情の北道と名つけたりけり

し十一オ

十一オ

今いぢめしきやうにも暮田甚之助

うけ引垣に忍のころと抱

傍の何処に年を歌かすい

駕をすねくハ灯の細き軒

ふかみろく梓のうそに養生水

吸そこたりハ口を穿る

冷めしといふは往古の歌まゝ

今朝つまゝ水し掌の内造酒

一風夢にあらなる山度り

新鐸カのこく折かゝに嘆

四休居士も別休義紅菴

あたい漆にうみえハおこ

し十三才

一年を花にまち月にうそあくとつわねてはゝ水を雑と

いふいはゆる車をかそふ水は車なしと物杜子が松と

足小は露身にしたるにあらはゝむ星家カに落る事五

つとこのうちに心をこむる文のいさをしと夕ゆ半

時辰のぬしひさしくカの造のをすをくりのりいまカは

をとす新古今集のよそに甲のやみあ人よりう

うみてあゝのあまのり舟のつなてに西巻情をいとむ巻

中のあつきと^しる年^はは周のななに年そあしたく
ひれ^{いんよ}れ、後の人をして又後のたぐみのひろきをとし
不^いれ^んもやうのい^いとすうをい^ろにそのあしたは
都の年^はなりとあもあな^り

鹿崎居士

祝

五

しん

世を忙しく暮す人有手を袖に^てた^るくすく
せ^のあり、秋中^のみの事^に感^しきくこと^にあけり
て^奇さ^きく^り妙^を振^めて^甚速^をあ^らは^す人

十行 廿四字詩

古今すくなく^しせず、三教の外^に雅^玉を^落お^のく^この
志^所に^すれ^り、^しま^京年^合の^句法^縦横^自在^を得^て
て^静坐^の樂^に志^雜の^百韻^をつ^らぬ、^筆落^て
凡^而を^驚め^訓成^て鬼^神を^信し^てあ^らた^に
と^新なり^と謂^つへ^し予^批下^に遊^て豈^をと^足り^み
殿^のあ^まり^一言^を添^しを、^ろに^紙上^を浮^りみ

柳陰齋

水
忌
跋

しん

池坊の水際
淡子の吟情

たとへば

忘ん

子け

なかり

この外あまたにことの甚おの 草を加へて世に
玉をまろはすに似たり 志の 雑の一色あり、
今更、たに雑、志のニ、色ハニ、色に、一、色、有、
事 容易に足出、一、の、

十行 廿四字

珍合誌

レナハオ

六朝變體多矣後人效之或葦布團如泥毫或弄酒盃
如蟠蛇然工夫亦至哉今也菊潭卒翁的滑藝之一章成
蓋雖有先作偏倚不容易乎更合戀雜而玄又玄誠知

冰守株駑才矣

河東散人里右跋

伶亮有るやと書すくたるを、水もあけに

いと水

一 ト居のくとは

我々堂の前ハ武塔天神の南の馬場につらなり其方園に
 隣り泉に名あり、水ハ深きにあうさ水とも北に聲有て
 菊の井とよめ、市人の室を養ひ行人のたすけと成、流
 ハ岡を旋て一村を抱く、高蓬風をいたみ苦竹春色あり
 、草ハ名たゝる花を許ひ曇りをあきらの朝日にいさよ
 ふ、うしろは鷲峰山の鐘声昇ふにいとまありす、西
 を望めはぬきりをかほかにして山樹雲にのく、日をね
 たむ、雲ハは落日を撃きまほゆくもぬわつさ一月く、
 につきぬ、秋雨の漲りハ桂麩の疆をつらぬき松桂を洗ひ

ト 居

- 思女思を爰すことは
- 孤島のふくろ
- ねこに春をつくることは
- 冬夜の吟 兼 秋の句
- 之手高岳古に送ることは

十行 廿四字讀

スチサンの
サシナシ

所ハいつ水のところをかあむ 傍人岩ふり尋あり
 閑居ハ地にあらず
 閑人ハくさしむ
 閑友ハ閑さなむ
 予常に四閑とあもふに其閑のいた水のハ恒の産たり
 批幅といとはずみ(か) (サ) 一て茶を喫し 夙夜にこ
 ろをゆたぬて坐すに三尺ふすに六尺以一丈に足らず
 其閑樂しみを知て閑をたのしむ誰をかいか 東村廬の
 故人勅空平谷也

河東へうつりし日

閑

て後波中庭を埋み 滿湖の扁舟とよハ一む たちまち
 迅流の波を飛し 渠(い)と巡つて水声情と暮々流氷かハけり
 ことすまひの手をか 一時よりとほやくいつくの船をか
 行(ヤ) サあれハ漸月影はかられに 世に声なき 時
 リて寛寺の行かひ走ハ着すを杖にし 着キハ類乃と一あふ
 一とすたひ 漁舟を欺き 吹海の浪まくら 阿佛かうら
 の周夜を妬す 限り有ける 命たりけりと思ふやハ又
 壺きとけり さるたぐひなるやと 孤灯に志と斗ふに
 閑を破る事社ことにかくのそと ありハあらずさあ
 うぬは訪ふことと 輪く 有りす 心の行に欲めたり 閑

十行 止四字詩

顔りに泣きたつハあつたけりに地つ息を同しうす之、
 抱て声添へ肩にいぢりて目の行所年の痛くものそ
 持せて膝に放し揺らしぬれハきのみはたどく敷け
 ふは是^是をすくへ倒れす、或はたを水とあやたくぬら
 び口を開きよく泡しけるハまことに天の滴りの雫み
 ハいつ水の所^所かへたん 苗代水の岐に洵ハ郭公の
 声とあふりたり 野野に色をとほし千穂を染むす
 曉を過て刈田の敷の時をたかす、朱漆の品々を
 撥けけたさ或ハ着き美人の命とつなぐハ天下の命の
 端なり 若ハ箱くハすに及い 甚切夫なり、人乳

才のおま明日をしうみの結尾哉
 その秋
 詔うけぬ月こそ安け小 草鷄歌
 全

嬰児を愛すこと甚矣

隣に客あり 朋とするに時を^時からす 其名を久米太
 郎と云、この若生たりといへとも室永享保をしるこ
 と生先めてたぬるし、漸くいさ地這ふに七七とよ
 リ父母たにしろすといへとも眠る事を知りさめては

十行 廿四字詰

喰を~~め~~そそ日を昇、飯一粒をににすす水は左左の手
にことうんと動て其意のふくもあらず、有ぬ
き事ともいかにも老を言水滌書とりくしく共に
とろこことしてても存すに夕陽のめをくもしく
す一方の無心何を以か余念のまき境はくろく
礼をそふ款色とうか、其破席するごと毎、あ
うこしく日と三午の器を清し陰炎をつみ若に
施し爲書の名と殊すといつても心のま、なりん
事いあにもさりともしひたすに有つ予め若と
たの人の居るなま、主に言をゆつろく人作居子

十行 廿四字語

なる哉 主に言をゆつろく、修す、節す衣食のろつ
く、身をしくす、さうろの行所とくめす天性のよ
そをひ万事許さふ、たけ小ハ邊み端を求す時
く凡とともに来る礼ととも帰日

鴛のあくろ

心戒ハ艶のひり浅尾ハひさこの樽なり、我鴛
の袋とハ錦の印にありす、^{カレホ}暖湯をいふ有あり、
一孔にこ是身し、是又葉をうらやみ形なれと
とさきりに冥き夜ありちろあしとをありちろあ

おん夜に抱きて寒を巻ふ 明水ハ其湯を
とほくと押うし 鳥打そよそよ 是そよよ
あざ成ととあもひもろけたるに 山岩 天明更燈
し 浮面を頼ふて 鈴煙ありさ水ハ 一句をなすも先作
有ましたと打割あるこそ 沸ましり水 前後とい
とみの、めゆれたる可もあり 其席にいとくまらさ
れいその句いあす水けり ぬく一あしも初心の意
きと神あたらほんん乾

鳴 姫

毛 僧 正

真葛原下はひありくのらとはいと、おもはさりしにあ
か^るくれ一声をはるかにして母ハかゝる水に足すいか
なるをのこにかいさなけ水けんと本意なし、集てやと
せり麓中に疎水了物三つ斗うこめきよいと鳴き打か
、まり或ははしりて春の日影のあもてにむかふ、一つ
は眠水にはあらむ当座にたしきこそものうけれ中に
毛並もすくれたるにと、水をたにいかさまにしていか
さまにせんと其暮野中の土をうかちてあ、なく隠し
しあもとの土にはあらずと称名すくなかりねと世に

頤頤
明之卷

半

教まへう水ぬ道たうけり 次くははやくも芝陰の一
たてなきにそ同たう生たう垣根にはうほひ共にかゝる
梅山吹の雲とこほして頤頤たる跡の鳥にまきり明年吹
吹立番よりも若しあすは物投やり命を丸めて玉くしけ
二つの毛をあうひて擲もて洒きてたやめる巻をばう
ハすこわかには翔り凡下になうひて共に眠る禪師は東西
西堂のたれに則斬て則趣きを解せはまうたく此もの
を知らり、赤鳥圓のためとて論にあたりし大ハ翁何と
かいひけむ古きふ足にハ陸州をわたみ池邊を要しみ水
情を以君子と呼しも終には己を愛し人を破るす心と養

十行 廿四字詰

17

ハ湖といすの雲ひあつた今ハ石世人草木を
識て草木たる事を知す 汝也動物にありて差別用捨
の境深し、此のあたは性さはりしうしてうへさう銀と
せかみと鳴あつ事明を待すして鳴す瘴氣を求めてハ
鳴月入窓のほのか成に術行音をうかハ眼を正して
鳴下獲に後小ハ鳴す得んはまた鳴也、時なく姫と許ハ
ハあり返りて尾をたて背を高くして鳴す 小ハ雄の
かたにはありて其性いと一につたなけくまさしく
先狸の玉面に誘ふにはまさなり、是か眼を鳴姫とよお
は孝標が女のさうな日記ふたよりとなり、せな君

路を過といきやう乳

法

瓢單をうつゝに是ぬほくゝありす

あかつきの一聲や雲の如の卷のこゝちにて

初雪や何と神佛佛の山かつら

秋章

来ぬ人を知らハこそ世に魂祭台

船引の玉の緒たに心尾衣か原台

稲妻にゆかりさ唐の木仲哉

は折ぬく腕くろ存ゆも毛ッろは白うて感あり、昔
に脱肉をさうひ冷粥とくうひて朝朝のわたるをねが
日や聲を運し二ハ香烟に嘯言辞柔輦のわたるとよ
ろこひ坐するこゝに手足を感感めえ耳を立水ハまつたく
衲衣をまといに似たりつらくいかなるすくせさや
ふれけん是を毛僧とよふよハ答ふる峰のまつ
あせ誠に奇異の逸物を得たり

冬夜

居士衣には短く十徳のハ長しひさこに酒なく音
に曲なり僧に醫ありたせの造弟上るく舎りて大

十行 廿四字

之午者

軼ハ徳を知らず 轍ハ仆散死の患をあつめさるもた
 とハ其具の肩にひこし 肩をあつめて品をついむ
 るいさ之ある人の常也りり 南嶺の隠居士何々の何某
 世をおひききあひに物し侍りて千軒の波のをのかし
 一有る夕をまうこひあひたをたしし 二子に教へ侍れ
 を守らせ 執宿を旅に 旅を執宿に 一こねまり生前
 の酔裡ハ茶を煎して 留ふすみんつくり こそこの
 葉の敷を つゆねて花鳥の道に 推ひわかれ路の心
 行そすや 行そすや 糸によろ 夢う五層とあや いおよりなとく

十行 廿四字詰

たやすくは過ありしと文ゆまの肩をいさうい
 みつあう之午者居士とよほしむ 語を助るものは
 焉哉年也と書しハもろこしのでにをは成し
 造る子之一は市を乞請合板行

享保二歳丁酉冬十一月

竹居所池ノ水踏向入

柏屋安光来

板行

し三十一

梅子文庫本

十行 廿四字

